みなぎの　5

―令和４～６年度　三木市立みき歴史資料館年報・紀要―

三木市立みき歴史資料館

目次

年報

Ⅰ　はじめに
　１　整備の背景と経緯……1
　２　コンセプト……1
　３　基本方針……2
Ⅱ　沿革等
　１　沿革……2
　２　施設の概要……2
Ⅲ　資料館事業活動
　１　展示事業及び関連事業……3
　２　年間イベント……19
　３　ボランティア……22
　４　トライやる・ウィーク……22
　５　施設管理……24
　６　来館者状況……24
Ⅳ　管理運営
　１　管理運営方式と体制……25
　２　組織図……25
　３　職員構成……25
　４　資料館協議会……25
Ⅴ　刊行物等
　１　令和４～６年度刊行物等……26

紀要

山城宮内少輔忠久について
　―秀吉と家康に重用された播磨国美嚢郡の在地領主―　依藤 保……(1)

例言

１　本書は、三木市立みき歴史資料館が令和４年度から令和６年度に実施した事業等を記録した年報紀要の第５号です。

２　紀要には依藤保氏（三木市文化財保護審議会副会長）に玉稿を賜りました。

年　　報

Ⅰ　はじめに

1　整備の背景と経緯

三木市は、天正６年（1578）から天正８年、織田信長の命を受けた羽柴秀吉と戦国大名毛利輝元に与した三木城主別所長治との間で起こった「三木合戦」の舞台となりました。

市内には、三木城跡のほか、織田方が三木城を攻めるために築いた付城跡群が数多く残っています。これら遺跡群は平成 25 年（2013）３月、「三木城跡及び付城跡・土塁」として国史跡に指定されました。

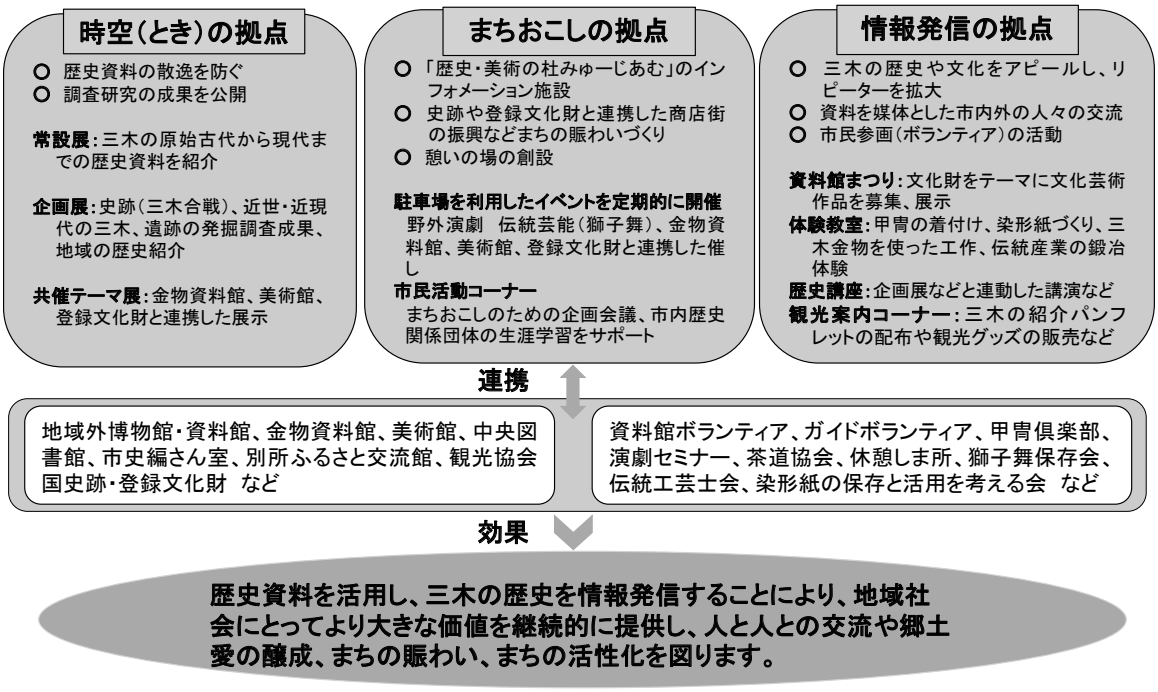
そして、史跡指定と前後するかたちで、これらの遺跡群を活かしたまちづくりを推進するため、平成 24 年６月、「三木歴史・美術の杜構想」を策定しました。

また、三木歴史・美術の杜構想に基づいて、三木城跡や城下町を含む付城跡群で囲まれた区域全体をフィールドミュージアムに見立てる「みき歴史・美術の杜みゅーじあむ」の中核施設として整備する「みき歴史資料館」のコンセプト、基本方針、事業活動計画、施設計画、管理運営計画を定めた「みき歴史資料館基本計画」を平成 28 年３月に策定しました。

これを受けて、平成 28 年５月５日、「みき歴史資料館」が開館しました。

2　コンセプト

コンセプトを「時空（とき）の拠点」「まちおこしの拠点」「情報発信の拠点」として整備しています。



３　基本方針

三木城二の丸跡に位置する三木市立図書館が、平成 27 年７月に移転したことに伴い、その施設を「みき歴史資料館」として活用し、美術館や金物資料館と一体的な利用をすることにより、三木市の歴史や文化を発信します。

「みき歴史・美術の杜みゅーじあむ」のインフォメーション施設としての機能を果たし、史跡や登録文化財（旧玉置家住宅・旧小河家別邸）、観光協会や道の駅等と連携したまちの賑わいづくりを担います。

Ⅱ　沿革等

１　沿革

平成 24 年	６月	三木歴史・美術の杜構想 策定
平成 25 年	３月 27 日	三木城跡及び付城跡・土塁が国指定史跡に指定
平成 27 年	３月	史跡三木城跡及び付城跡・土塁保存管理計画書策定
平成 27 年	７月	三木市立図書館が移転
平成 27 年	12 月 26 日	展示工事着手
平成 28 年	３月	みき歴史資料館基本計画 策定
	３月 26 日	三木市立歴史資料館条例 策定
	４月 22 日	三木市立歴史資料館規則 策定
	４月 28 日	展示工事完了
	５月 ５日	開館
		オープニングイベントを開催

２　施設の概要

着手　平成 27 年 12 月 26 日
完成　平成 28 年 ４月 28 日
開館　平成 28 年 ５月 ５日
構造　鉄筋コンクリート造り　地上３階
延べ床面積　1,903 平方メートル
総事業費　　14,893,200 円

Ⅲ　資料館事業活動

1　展示事業及び関連事業

(1) 常設展示

常設展示は、三木の原始古代から現代までの６つの時代に分けて、発掘調査によって出土した遺物、古文書等の歴史資料を約 300 点展示しています。

① 三木のあけぼの

三木市は、加古川とその支流美嚢川との合流点の周辺から人々の営みの痕跡を伝える遺跡が数多く見られ、時代が下るにつれて、上流へと広がりを見せるようになります。

三木市において遺跡の存在が顕著になるのは、弥生時代の中期からです。

② 古墳時代の三木

古墳時代になると、美嚢川に沿ってさらに上流へと遺跡の分布が見られるようになります。

中期から後期に入ると、台地や斜面地、段丘の至るところに数多くの古墳が築かれるようになります。美嚢川と加古川の合流地点、市西部の美嚢川に臨む南側及び北側丘陵、志染川の南側丘陵に集中しています。

③ 古代・中世の三木

奈良時代に編さんされた『播磨国風土記』によると、美嚢郡には、高野里・枚野里・志染里・吉川里の四里があったことが記されています。

平安末期から鎌倉初期にかけての荘園制の成立に伴い、市内においても久留美荘など数箇所の荘園が確認できます。

中世に入ると、市内各地において寺院の活動が活発化していきます。

④ 三木城の時代

三木（美嚢）郡三木城を拠点とした三木別所氏は、赤松庶流家に出自をもち、東播磨８郡（三木・明石・印南・加古・多可・神東・加西・加東）の守護代に任じられるなど、戦国期東播磨最大の勢力として、その広い範囲に影響力を及ぼしました。

三木合戦後は、織田・豊臣・徳川の家臣が入城し、元和元年（1615）の一国一城令により、廃城となりました。

⑤ 近世の三木

江戸時代、三木町は美嚢川沿いの交通の要地に位置し、18 世紀中頃から 19 世紀前半にかけては金物の町として発展します。一方、領主支配が複雑に入り組んだ農村部は、耕地の拡大によって農業生産が増加するとともに、大庄屋組などの地域運営のシステムがしだいに整備されていきました。

⑥ 近現代の三木

明治時代に入ると、三木も近代化が進んでいきます。とくに、山田錦の開発に象徴される農業の発展、三木金物業の地場産業としての定着と戦後における輸出産業化は、現在の三木の地域イメージとも直結する重要な事項です。

戦後は、町村合併・市制施行やニュータウンの造成が進められ、現在の三木にいたりました。

常設展示風景

（２）企画展示
【令和４年度】
①　「神戸電鉄粟生線開通 70 周年～三木駅新駅舎完成記念～」

会期	内容	来館者数
令和４年４月９日（土）～６月 26 日（日）	開通 70 周年を迎えた神戸電鉄粟生線の歩みを、近年の粟生線活性化の取組や３月に完成した三木駅新駅舎の様子とあわせて紹介。	4,698 人

〔関連事業〕

日時	内容	参加者数
令和４年４月 24 日（日）13 時 30 分～ 15 時	企画展特別講演会「神戸電鉄の歴史」 講師：中西　信（当館学芸員）	42 人
令和４年５月 15 日（日）13 時 30 分～ 15 時	企画展特別講演会「神戸電鉄の魅力～粟生線を中心として～」 講師：米倉　裕一郎氏（デ 101 まもり隊事務局代表）	40 人

企画展ちらし（表・裏）

展示風景

企画展特別講演会（米倉裕一郎氏 ）

② 「三木飛行場の記憶」

会期	内容	来館者数
令和４年７月 16 日（土）～９月 25 日（日）	太平洋戦争末期に建設された三木飛行場の当時の写真やゆかりの資料を通して、飛行場や兵隊、近隣住民との交流の様子などを紹介。	2,831 人

〔関連事業〕

日時	内容	参加者数
令和４年８月６日（土） 13 時 30 分～ 15 時	企画展特別講演会「三木飛行場をさぐる」 講師：宮田　逸民氏（三木飛行場を記憶する会代表）	38 人

企画展ちらし（表・裏）

展示風景

企画展特別講演会（宮田逸民氏 ）

③ 「地域の史料たち６～吉川の歴史～」

会期	内容	来館者数
令和４年 10 月 22 日（土）～ 12 月 18 日（日）	市史編さん室との共催展として、新三木市史地域編『吉川の歴史』の刊行に至るまでの取組や調査・研究のさまざまな成果について紹介。	1,927 人

〔関連事業〕

日時	内容	参加者数
令和４年11月26日（土）10 時～ 12 時	企画展特別講演会「地域の歴史を楽しむ－新三木市史地域編『吉川の歴史』の刊行」 藤田　均氏（三木市史編さん委員会吉川部会長）	28 人

企画展ちらし（表・裏）

展示風景

企画展特別講演会（藤田均氏 ）

④ 「三木市内　小・中・特別支援学校の校舎の記憶」

会期	内容	来館者数
令和５年１月 21 日（土）～３月 26 日（日）	明治時代以降に開校された市内の小・中・特別支援学校の変遷を、統廃合で廃校になった学校も含めて、校舎を中心に関係資料や写真を通して紹介。	2,663 人

企画展ちらし（表・裏）

展示風景

【令和５年度】
① 「細川町の祭り屋台展」

会期	内容	来館者数
令和５年４月 22 日（土）～６月 25 日（日）	細川町の４つの神社で奉納される祭り屋台について、屋台衣装や祭りに関する写真などを通して紹介。	2,994 人

〔関連事業〕

日時	内容	参加者数
令和５年５月 21 日（日）13 時 30 分～ 15 時	企画展特別講演会「細川町の祭りと屋台－六社神社屋台の古刺繍を中心に－」 講師：山田　貴生氏（三木市文化財保護審議会委員）	18 人

企画展ちらし（表・裏）

展示風景

企画展特別講演会（山田貴生氏 ）

② 「播磨の鉄道風景～過ぎ去った時間を再現する～」

会期	内容	来館者数
令和５年７月 15 日（土）～９月 24 日（日）	三木市在住の鉄道写真家・神澤誠一氏が高度経済成長期に撮影された播磨地域の鉄道写真を通し、当時の鉄道風景や体験談などを紹介。	3,167 人

企画展ちらし（表・裏）

展示風景

③ 「地域の史料たち７～三木の歴史～」

会期	内容	来館者数
令和５年 10 月 14 日（土）～ 12 月 24 日（日）	市史編さん室との共催展として、新三木市史地域編『三木の歴史』の刊行に至るまでの取組や調査・研究のさまざまな成果について紹介。	2,048 人

〔関連事業〕

日時	内容	参加者数
令和５年 11 月 19 日（日）13 時 30 分～ 15 時 30 分	企画展特別座談会「再発見！三木の歴史－市史編さんから見えてきたもの－」 パネラー：岩崎　良則氏・稲見　秀穂氏・宮田　逸民氏・土井　崇明氏（三木市史地域編専門委員会三木部会）	37 人

企画展ちらし（表・裏）

展示風景

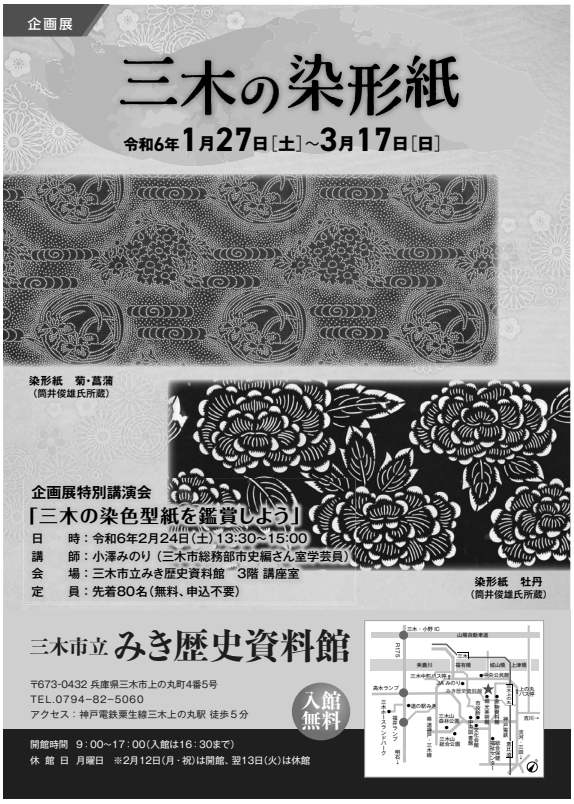
企画展特別座談会

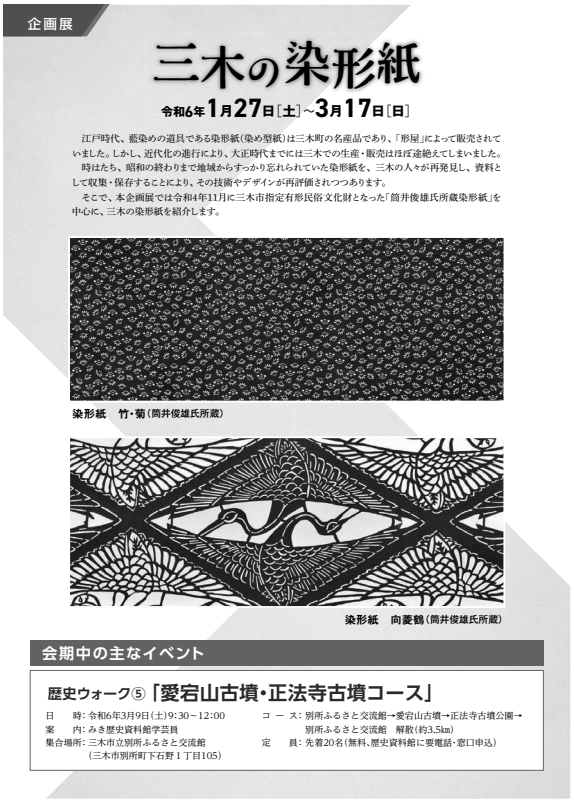
④ 「三木の染形紙」

会期	内容	来館者数
令和６年１月 27 日（土）～３月 17 日（日）	令和４年 11 月に市指定文化財に登録された「筒井俊雄氏所蔵染形紙」を中心に、かつて三木の主要産業であった染形紙を紹介。	2,352 人

〔関連事業〕

日時	内容	参加者数
令和６年２月 24 日（土）13 時 30 分～ 15 時	企画展特別講演会「三木の染色型紙を鑑賞しよう」講師：小澤　みのり（三木市総務部市史編さん室学芸員）	43 人





企画展ちらし（表・裏）

展示風景

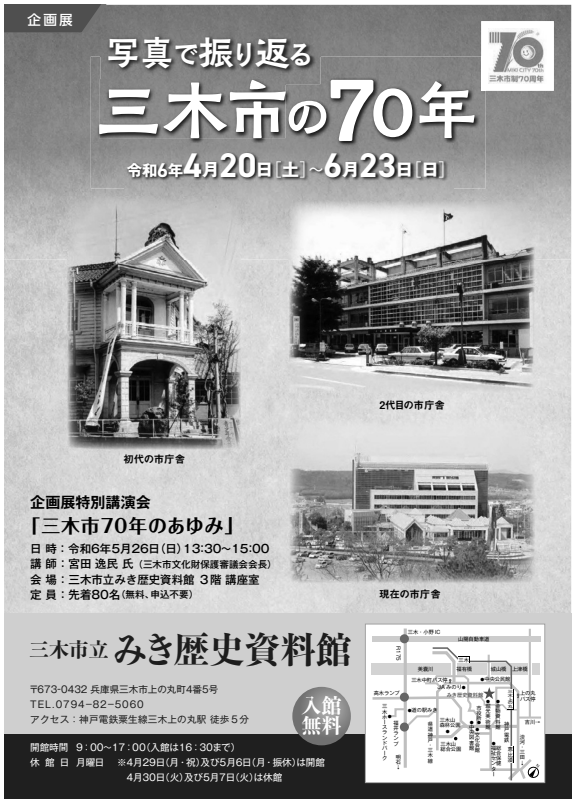
企画展特別講演会（小澤みのり）

【令和６年度】
① 「写真で振り返る三木市の 70 年」

会期	内容	来館者数
令和６年４月 20 日（土）～６月 23 日（日）	昭和 29 年 7 月 1 日の市制発足当時から現在に至るまでの 70 年間の主な出来事を記録した写真や三木市・吉川町合併に関する資料、市勢要覧などの三木市ゆかりの資料を通して、三木市の発展のあゆみを紹介。	2,667 人

〔関連事業〕

日時	内容	参加者数
令和６年５月 26 日（日） 13 時 30 分～ 15 時	企画展特別講演会「三木市 70 年のあゆみ」 講師：宮田　逸民氏（三木市文化財保護審議会会長）	33 人



企画展ちらし（表・裏）

展示風景

企画展特別講演会（宮田逸民氏 ）

②「上田桑鳩展～書の流儀～」

会期	内容	来館者数
令和６年７月 27 日（土）～９月 29 日（日）	三木市制施行 70 周年記念事業として、「上田桑鳩展」をみき歴史資料館と堀光美術館で開催。みき歴史資料館では、上田桑鳩が市内の小中学校へ寄贈した作品を中心に三木市との関わりを紹介。	1,952 人

〔関連事業〕

日時	内容	参加者数
令和６年９月７日（土） 13 時～ 14 時 30 分	企画展特別講演会「上田桑鳩の魅力」 講師：中原　志軒氏（書道団体奎星会会長）	110 人

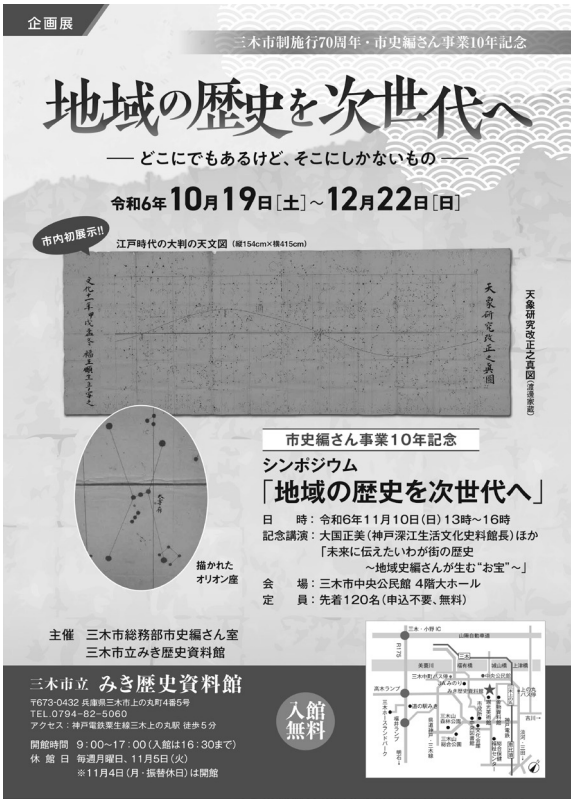
企画展ちらし（表・裏）

展示風景

企画展特別講演会（中原志軒氏 ）

③ 「地域の歴史を次世代へ―どこにでもあるけど、そこにしかないもの―」

会期	内容	来館者数
令和６年 10 月 19 日（土）～ 12 月 22 日（日）	市史編さん事業開始から 10 年目を迎え、これまでの市史編さん室の取組を振り返りながら、調査・収集した市内にある貴重な地域資料を紹介。	1,671 人



企画展ちらし（表・裏）

展示風景

④ 「別所町の秋祭り屋台展」

会期	内容	来館者数
令和７年１月 25 日（土）～３月 23 日（日）	三木市別所町花尻、興治及び高木の屋台を中心に、水引幕や高欄掛けなどの屋台衣装や写真を通して、秋祭りに登場する別所町の屋台を紹介。また、併せて令和 6 年 10 月 26 日に市制 70 周年を記念し開催された「三木の祭り屋台大集合」の様子も写真にて紹介。	2,191 人

〔関連事業〕

日時	内容	参加者数
令和７年２月 23 日（日） 13 時 30 分～ 15 時	企画展特別講演会「別所町の祭と屋台」 講師：山田　貴生氏（三木市文化財保護審議会委員）	26 人

企画展ちらし（表・裏）

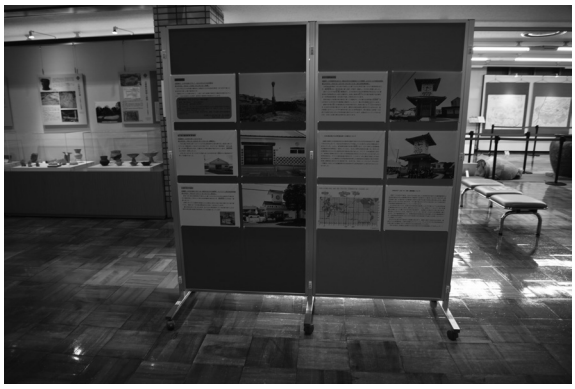
展示風景

企画展特別講演会（山田貴生氏 ）

(3)　その他の展示

①　協賛展示「時の記念日展」

会期	内容	来館者数
令和４年６月 10 日(金) ～７月９日（土）	観光振興課主催「みっきぃ子午線フェスタ」の協賛事業として、三木市内に点在する子午線モニュメントをパネルで紹介。	1,185 人
令和５年６月 10 日(土) ～７月８日（土）		957 人
令和６年６月８日（土） ～７月 13 日（土）		1,032 人



令和４年度展示風景

令和５年度展示風景

令和６年度展示風景

２　年間イベント（歴史講座、歴史ウォーク、体験教室等）

三木の歴史や文化をアピールし、リピーターの拡大を図るため、市内外の方々が気軽に訪れることができるイベントを開催しています。

【令和４年度】

月	日	曜日	事　業　名	参加者数
4	9、10、23、24		企画展関連イベント「楽しい鉄道模型走行会」 協力：神戸電鉄株式会社	744人
5	3～5			
5	22	日	歴史ウォーク①「近世絵図で歩く三木城跡コース」	11人
6	12	日	企画展特別イベント「鉄道写真を撮ってみよう！」 講師：米倉 裕一郎氏・寺田 氏（デ101まもり隊）	12人
7	24	日	企画展「三木飛行場の記憶」展示解説会 講師：宮田 逸民氏（三木飛行場を記憶する会代表）	36人
9	3	土		
9	25	日	特別講演会「歴史を活かした三木の街づくり」 講師：田辺 眞人氏（園田学園女子大学名誉教授）	72人
10	30	日	歴史ウォーク②「ホースランドパーク周辺付城跡コース」	17人
11	19	土	金物資料館特別企画展連動講座「先人の努力と技を後世に」 講師：杉田　智彦氏（三木工業協同組合鏝部会）	13人
11	27	日	歴史ウォーク③「吉川町有安・鍛治屋の文化財コース」 案内：中久保　辰夫氏（京都橘大学文学部歴史遺産学科准教授）	18人
12	18	日	歴史ウォーク④「愛宕山古墳・正法寺古墳コース」	6人
12	24	土	三木城二の丸跡発掘調査現地説明会	120人
1	29	日	歴史ウォーク⑤「秀吉本陣跡コース」	15人
2	5	日	企画展「三木市内　小・中・特別支援学校の校舎の記憶」展示解説会	12人
3	12	日		
2/26～3/10			お雛さま展スタンプラリー	321人

年間合計 1,397 人

鉄道風景写真を撮ってみよう！（6/12）

展示解説会（7/24）

歴史ウォーク②（10/30）

歴史ウォーク③（11/27）

【令和５年度】

月	日	曜日	事　業　名	参加者数
4	30	日	歴史ウォーク①「近世絵図で歩く三木城跡コース」	84人
5	28	日	歴史ウォーク②「ホースランドパーク周辺付城跡コース」 案内：木内　内則氏（中世城郭研究家）	87人
8/11、13、19、20			企画展関連イベント「楽しい鉄道模型走行会」 協力：三木鉄道模型クラブ	306人
8	20	日	企画展関連イベント「楽しいミニＳＬ乗車体験会」 共催：三木城下町まちづくり協議会	244人
9	23	土	歴史講座「三木城の戦い」 講師：金松　誠（みき歴史資料館係長）	76人
10	22	日	歴史ウォーク③「別所ゆめ街道コース」 案内：宮田　逸民氏（三木市文化財保護審議会会長）	15人
11	18	土	三木城本丸跡発掘調査体験イベント	42人
11	25	土	歴史ウォーク④「秀吉本陣跡コース」 案内：宮田　逸民氏（三木市文化財保護審議会会長）	31人
12	23	土	『三木の歴史』刊行記念ウォーク「下五ヶ町コース」 案内：宮田　逸民氏（三木市文化財保護審議会会長）	16人
1/19～3/31			長治公とともに三木城下町を巡るリアル謎解きゲーム	178人
2	12	月	歴史講座「戦国武将松永久秀の実像」 講師：金松　誠（みき歴史資料館係長）	75人
2/25～3/10			お雛さま展スタンプラリー	404人
3	9	土	歴史ウォーク⑤「愛宕山古墳・正法寺古墳コース」	24人

年間合計 1,582 人

楽しいミニ SL 乗車体験会（8/20）

楽しい鉄道模型走行会（8/20）

歴史ウォーク①（4/30）

歴史ウォーク③（10/22）

歴史ウォーク④（11/25）

歴史ウォーク⑤（3/9）

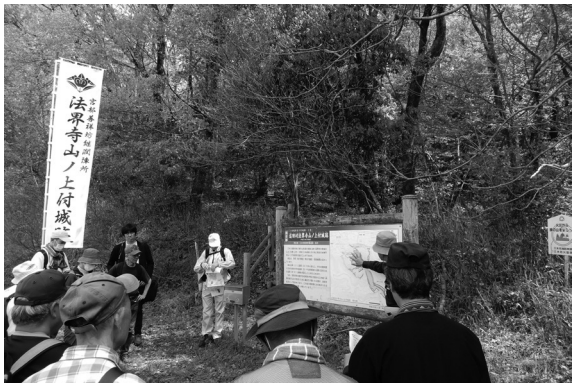
【令和６年度】

月	日	曜日	事　業　名	参加者数
4/1～3/31			長治公とともに三木城下町を巡るリアル謎解きゲーム	280人
4	17	水	歴史ウォーク①「這田村法界寺山ノ上付城跡コース」 案内：宮田　逸民氏（三木市文化財保護審議会会長）	39人
5	5	日	三木合戦展示解説	21人
5	19	日	歴史ウォーク②「近世絵図で歩く三木城跡コース」	30人
8	25	日	特別講演会「愛宕山古墳の調査成果とその意義」 講師：福永　伸哉氏（大阪大学大学院人文学研究科教授） 上田　直弥氏（大阪大学大学院人文学研究科助教）	80人
11	16	土	三木城二の丸跡発掘調査体験イベント	15人
11	23	土	ギャラリートーク「三木市に伝わる巨大な天文図－江戸時代のプラネタリウム－」 ガイド：冨田　良雄氏（元京都大学大学院理学研究科助教）	32人
11	24	日	歴史ウォーク③「秀吉本陣跡コース」 案内：宮田　逸民氏（三木市文化財保護審議会会長）	24人
12	7	土	三木城本丸跡・二の丸跡発掘調査現地説明会	41人
2	16	日	歴史ウォーク④「ホースランドパーク周辺付城跡コース」	19人
2/24～3/9			お雛さま展スタンプラリー	382人
3	9	日	歴史ウォーク⑤「愛宕山古墳・正法寺古墳コース」	16人
3	29	土	歴史講座「遺跡から見た三木合戦」 講師：金松　誠（みき歴史資料館係長）	76人

年間合計 1,055 人

発掘調査体験（11/16）

発掘調査現地説明会（12/7）



歴史ウォーク①（4/17）

歴史ウォーク②（5/19）

歴史ウォーク③（11/24）

歴史ウォーク⑤（3/9）

３　ボランティア

資料館の展示解説を行う「みき歴史資料館ボランティア」は、新型コロナウイルス感染症対策のため、活動を見合わせました。

４　トライやる・ウィーク

三木市内の中学２年生を対象として実施しました。実施期間中、受け入れ中学校、人数、スケジュールは以下の通りです。

【令和４年度】

月日	学校名（人数）	9:30	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	15:30
11月15日	自由中学校（１名） 三木東中学校（２名）	オリエンテーション	館内見学→三木城跡見学 （鷹尾山城跡→新城跡→本丸跡→二の丸跡）		昼食	歴史資料の撮影等について			

月日	学校名（人数）	9:30	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	15:30
11月16日	自由中学校（１名） 三木東中学校（２名）	平井山ノ上付城跡、高木大塚城跡などの見学			昼食	自由課題			

月日	学校名（人数）	9:30	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	15:30
11月17日	自由中学校（１名） 三木東中学校（２名）	跡部東谷遺跡の発掘調査体験			昼食	跡部東谷遺跡の発掘調査体験		発表 感想	

月日	学校名（人数）	9:30	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	15:30
11月18日	自由中学校（１名） 三木東中学校（２名）	愛宕山古墳→正法寺古墳→ （這田村法界寺山ノ上付城跡ほか）			昼食	勾玉作り		発表 感想	

跡部東谷遺跡の発掘調査体験

【令和５年度】

月日	学校名（人数）	9:30	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	15:30
11月14日	三木中学校（２名） 三木東中学校（１名） 別所中学校（１名）	オリエンテーション	館内見学→三木城跡見学 （鷹尾山城跡→新城跡→本丸跡→二の丸跡）		昼食	歴史資料の撮影等について		三木合戦 ビデオ鑑賞	

月日	学校名（人数）	9:30	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	15:30
11月15日	三木中学校（２名） 三木東中学校（１名） 別所中学校（１名）	三木城本丸跡の発掘調査体験			昼食	三木城本丸跡の発掘調査体験			

月日	学校名（人数）	9:30	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	15:30
11月16日	三木中学校（２名） 三木東中学校（１名）	平井山ノ上付城跡、高木大塚城跡などの見学			昼食	自由課題		発表 感想	

月日	学校名（人数）	9:30	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	15:30
11月17日	三木中学校（２名） 三木東中学校（１名）	愛宕山古墳→正法寺古墳→ （這田村法界寺山ノ上付城跡ほか）			昼食	勾玉作り		発表 感想	

郷土資料学習

平井山ノ上付城跡見学

【令和６年度】

月日	学校名（人数）	9:30	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	15:30
11月12日	三木中学校（１名） 三木東中学校（３名）	オリエンテーション	資料館展示解説体験	美術館聞き取り調査	昼食	市民活動支援室　書道体験			

月日	学校名（人数）	9:30	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	15:30
11月13日	三木中学校（１名）	課題調査（歴史資料館周辺の調査）			昼食	市史編さん室　歴史資料の取り扱い体験			

月日	学校名（人数）	9:30	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	15:30
11月14日	三木中学校（１名） 三木東中学校（３名）	課題調査（歴史資料館周辺の散策） オリエンテーション	資料館展示解説体験	発掘オリエンテーション	昼食	三木城二の丸跡の発掘調査体験		発表 感想	

月日	学校名（人数）	9:30	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	15:30
11月15日	三木中学校（１名）	課題制作（てくてくマップ作成）			昼食	課題制作（てくてくマップ作成）		発表 感想	

歴史資料の取り扱い

発掘調査体験

５　施設管理

【令和４年度】

実施日	内容
令和４年６月 19 日	屋外灯転倒防止応急措置
令和４年６月 27 日	2 階避難口誘導機器交換作業
令和４年 12 月５日	常設展示室「近世の三木」コーナー照明器具 LED 化工事
令和５年１月７日	埋設汚水管詰まり抜き作業
令和５年２月 13 日	常設展示室「近現代の三木」コーナー照明器具 LED 化工事
令和５年２月 13 日	玄関外側自動ドア修理工事

【令和５年度】

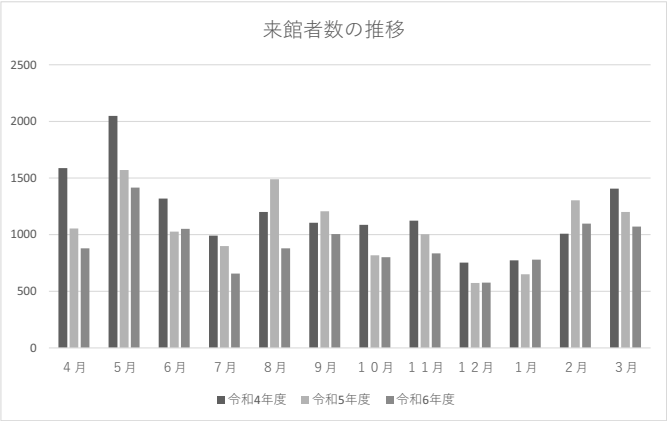
実施日	内容
令和５年５月８日、10 日	前庭低木剪定作業
令和５年６月 16 日	裏庭低木剪定作業
令和５年 12 月１日	多目的トイレ詰まり抜き作業
令和５年 12 月４日	１階受付カウンター及び玄関ホール照明器具 LED 化工事
令和５年 12 月 26 日	企画展示室 LED スポットライト交換作業

【令和６年度】

実施日	内容
令和６年６月４日	１階多目的トイレ換気扇修繕作業
令和６年６月 15 日	資料館北側低木剪定作業
令和６年６月 20 日	資料館西側低木剪定作業
令和６年９月３日	資料館南側低木剪定作業
令和６年９月 20 日	県道三木三田線沿い電柱（本町１丁目）に歴史資料館案内看板設置
令和６年 11 月 28 日	高架水槽給水不具合緊急対応作業及び状況調査
令和６年 12 月 24 日	企画展示室展示ケース修繕作業

６　来館者状況

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
令和4年度	来館者数	1588	2,048	1,318	991	1,201	1,105	1,086	1,124	754	774	1,009	1,407	14,405
	開館日数	26	25	26	27	26	26	26	24	23	23	23	26	301
令和5年度	来館者数	1,055	1,571	1027	900	1,490	1,207	818	1,003	573	651	1,303	1,201	12,799
	開館日数	26	26	26	26	27	26	26	25	23	23	25	26	305
令和6年度	来館者数	879	1,415	1051	656	879	1,005	801	834	576	780	1,097	1,071	11,044
	開館日数	25	27	27	26	27	25	27	26	23	23	23	25	304



Ⅳ　管理運営

三木市の歴史に関する歴史研究・資料の収集保管の接点となるとともに市民をはじめ多くの人々の利用・活動の場となるため、施設の業務を効率的かつ円滑に行い、計画的な管理運営を目指しています。

１　管理運営方式と体制

(1)　運営方式

資料館の運営にあたっては、教育委員会が直営で行っています。

(2)　運営体制

資料館の業務は、文化・スポーツ課文化遺産係が運営しています。

２　組織図

三木市教育委員会教育総務部
文化・スポーツ課

↓

文化遺産係

↓

三木市立みき歴史資料館

↓

館長

↓

係長・学芸員

３　職員構成

年度 職名	令和４年度	令和５年度	令和６年度
館長 （会計年度任用職員）	冨田　敬一	冨田　敬一	冨田　敬一
係長	金松　誠	金松　誠	金松　誠
学芸員 （会計年度任用職員）	中西　信	中西　信	岡田　美穂
学芸員 （会計年度任用職員）	大西　正女	牛嶌　斗惟	川上　万尋

４　資料館協議会

資料館の充実した運営を図るため、資料館協議会を設置しています。みき歴史資料館の運営に関し館長の諮問に応ずるとともに、館長に対して意見を述べます。

【令和４年度】

役職	氏名	所属等	協議会開催日
会長	木村　修二	学識経験者	第１回 令和４年 10 月 12 日
副会長	安田　信吉	市内教育・学術・文化団体の代表	
委員	神木　徹	市内教育・学術・文化団体の代表	
委員	大塚　康生	市内学校長の代表者	第２回 令和５年３月 15 日
委員	松下　君子	一般公募	
委員	真野　朱美	一般公募	

（敬称略）

【令和５年度】

役職	氏名	所属等	協議会開催日
会長	木村　修二	学識経験者	第１回 令和５年 10 月 19 日
副会長	安田　信吉	市内教育・学術・文化団体の代表	
委員	吉岡　雅寿	市内教育・学術・文化団体の代表	
委員	大塚　康生	市内学校長の代表者	第２回 令和６年３月 15 日
委員	松下　君子	一般公募	
委員	真野　朱美	一般公募	

（敬称略）

【令和６年度】

役職	氏名	所属等	協議会開催日
会長	木村　修二	学識経験者	第１回 令和６年 10 月 17 日
副会長	大塚　康生	市内学校長の代表者	
委員	湯浅　洋司	市内教育・学術・文化団体の代表	
委員	安田　信吉	市内教育・学術・文化団体の代表	第２回 令和７年３月 12 日
委員	松下　君子	一般公募	
委員	真野　朱美	一般公募	

（敬称略）

Ⅴ　刊行物等

１　令和４～６年度刊行物等

【令和４年度】

『みなぎの４　－令和３年度　三木市立みき歴史資料館年報・紀要－』

350 部　Ａ４判　22 頁　令和５年３月 31 日発行　650 円

「歴史を巡る播磨路の旅・御城印」

東・北播磨４市の観光協会の連携による、城跡を活用した観光客誘客促進事業の協賛として、「秀吉本陣」の御城印を制作・販売。

2,000 枚　令和４年４月 28 日販売開始　300 円

【令和６年度】

「国指定遺跡 三木城跡及び付城跡・土塁ウォーキングマップ」（第３版）

7,000 部　Ａ１判（両面Ａ４判折り）　令和６年９月発行　無償配布

切り絵の「三木城御城印」

江戸時代に三木の特産品として広く知られていた染型紙を、切り絵でデザインした御城印を制作・販売。

500 枚　令和７年１月 25 日販売開始　800 円

紀　　要

山城宮内少輔忠久について

――秀吉と家康に重用された播磨国美囊郡の在地領主――

依藤　保

一　はじめに

小野市浄谷町の浄土寺に、山城宮内少輔忠久の書状が残されている（史料3）[1]。この書状は、羽柴（豊臣）秀吉の家臣として、播磨浄土寺の訴えに対処したものである。この人物は、高柳光寿・松平年一著『戦国人名辞典』に、山代忠久の姓名で、秀吉馬廻、金切裂指物使番（きんのきっさきさしものつかいばん）等として収録されている[2]。また、旧版の『加東郡誌』には、現在の加東市松尾の字城に天正の頃山城宮内の居城があったとの記述がある[3]。

三木合戦時に秀吉に従軍してきた武士が在地出身者として伝承される例がある[4]。そのため、山城宮内少輔も他国からやって来て、合戦後に加東郡松尾村などに給分地を与えられたとみていた。しかし、加東市平木の播磨清水寺に山城官兵衛田地寄進状がある[5]。このことから、山城氏が加東郡等の在地領主である可能性も捨てきれないでいた。

二〇二三年刊行の『新三木市史』第四巻〔資料編古代・中世〕に三木市口吉川町久次の区有文書「大塚郷山之由来写」（史料1）が活字翻刻された。ここに美囊郡吉河上荘長谷村（三木市吉川町長谷）の在地領主山城氏の存在を確認した。しかし、名字が同じというだけでは宮内少輔忠久と関連づけることはできなかった。

過日、山形県文化財保護協会理事・事務局長の大宮富善氏から、兵庫県立考古博物館の中川渉氏と三木市立みき歴史資料館の金松誠氏を通じて、出羽新庄藩（山形県新庄市周辺）の戸沢家家臣川部隆直の先祖たる山城宮内について照会があった。その際に大宮氏の史料紹介「新庄戸沢藩川部伊織家文書[6]」の提供をうけた。驚くべきことに、ここに掲載された川部伊織家の「先祖書写」に、その先祖山城宮内が生国播州三木（美囊郡）と明記されていた。

はからずも、所在の異なる史料が焦点を結び、山城宮内少輔忠久が三木市出身であることが明らかとなった。この事実はこれまでまったく知られていなかった。これを機に、秀吉と徳川家康に重用された有能なこの人物についての紹介をしたい。

二　播磨国美囊郡吉河上荘長谷村在地領主の山城氏

史料1は、山城氏が吉河上荘長谷村の在地領主であったことを示す史料である。少し長いが全文を掲げる。

史料1　大塚郷山之由来写（「久次区有文書」[7]）

大塚郷山之由来　本紙之写
本紙之義者里脇村有之
一赤松様御代、千本栂之内与申者深山ニ而御座候処、鷹鶴巣掛

堅御番被仰付仕候、依君功(勲)ニ番谷大塚山千本栂之内、東西三十町余、南北弐拾丁余、大廻り境、西者善祥寺、南者二谷村領限り、北東者湯谷村限り、大塚郷江被下、此山之分者法度堅被仰出、余郷ゟ入もの於有之ニ者剥取、又者手構之者者打擲打殺候而も不苦与被仰、縦此山入相之内我儘ニ林シ改道仕ものハ山郷として伐取り、急度法度仕、後々末々迄山郷入相ニ可仕と被仰出候御事、

一徳平殿と申者、在時、小松伐取被成候ニ付、大塚郷之者只壱人荒物取りニ参候ニ付、彼壱人之もの松木ニしばり付置、伐取被成候処、藤田六拾三人之侍衆御出候而、徳平殿と三日取合被成候、然処加東郡寄(依)藤殿御出御扱被成、先規筋目ニ被仰付、相済候御事、

一山城殿与申者、長谷村者ヲ大塚山江押御入被成候ニ付、大塚之者共出合候て互ニ打擲仕候処、大塚之地頭竹原殿、御聞被成、長谷村取懸り、山城殿はつかう(発向)被成候処ヲ、渡瀬殿御扱被成、右□(之カ)通り此山江入もの者はぎ取、又逃ものハ其者之家迄追付可取、手構ハ打擲・打殺しても不苦候と、堅被仰出候御事、

一中川右衛門(秀成)太夫様御代、竹中牛之助殿と申ハ田谷村之御給人ニ而御座候、百性ヲ連大塚山江押御入被成候時、古田平治殿田谷村江入はつかう申、彼牛之助踏潰と被仰候処、中川平右衛門殿御扱被成、田谷村越中と申下用人大塚江御渡被成、右之御扱平右衛門殿江進申処、一段被仰候而、大塚山之義先年山郷入相ニ堅被仰出候御事、

一伊木長門(忠繁)守様御代、志殿村太左衛門と申者大塚山江入申処、荒物取ニ致候処、すまい(かカ)申ヲ打擲候、つよく仕候と御給人浅野十右衛門殿と申、彼太左衛門相断候得共、大塚山者謂有と及聞候間、入込打レ候共其者之損と被仰出候御事、

右之通り千本栂之内番谷之義者古ゟ山郷入相ニ極り申候、縦山郷之内一ケ村連(迎カ)而我儘ニ改道仕候ハ、、山郷として伐取り、先規之通り相守候、以上、

長慶安元年申二月

藤田判
徳平判
山城判
渡瀬判
寄藤判
中川右衛門太夫判
伊木長門守判

大塚山郷三ケ村

〔傍線部分読み下し〕

一得平(とくひら)殿と申す者、ある時、小松伐取(きりと)りなされ候につき、大塚郷の者ただ一人荒物取りに参り候につき、彼の一人(いちにん)の者松の木に縛りつけ置き、伐取りなされ候ところ、藤田六三人の侍衆御出で候て、得平殿と三日取り合いなされ候、然るところ加東郡の依藤(よりふじ)殿御出で御扱いなされ、先規の筋目に仰せ付けられ、相済み候御事、

一山城殿と申す者、長谷村の者を大塚山へ押して御入れなされ候につき、大塚の者共出合い候て互に打擲仕り候ところ、大塚の地頭竹原殿、御聞きなされ、長谷村へ取り懸り、山城殿発向なされ候ところを、渡瀬殿御扱いなされ、右のとおり此の山へ入る者は剥ぎ取り、又逃ぐる者

は其の者の家迄追っ付けて取るべし、手構へ（手向かへ）ば打擲・打ち殺しても苦しからず候と、堅く仰せ出でられ候御事、

藤田氏以下、事件に登場する武士・裁定者、またはその子孫が大塚山郷三ヶ村に宛てた形式をとる文書の写しである。大塚郷は近世の槇村・久次村・西山村・里脇村および吉祥寺村の五ヶ村（吉河上荘西端域、三木市口吉川町東端域）で構成とのこと。ここに三ヶ村とあるは、『慶長播磨国絵図』にみえる槇村・久次村（久次村と西山村）および大塚村（里脇村と吉祥寺村）に合致する。

もとは慶安元年（一六四八）二月作成の由緒書きの写しを装う文書だったのに違いない。江戸時代の文書で干支の誤記はままみられる。この写しを作成する際に、申の年の慶長の誤りかと「長」を付記したのである。ここでは年次の詮索をしないことにする。ともあれ、記載される事件は事実であったと思えるので、伝聞ではあるものの貴重な史料といえる。

第一条は、そもそも番谷大塚山千本栂の内で東西三〇町余、南北二〇町余の地が大塚郷三ヶ村の入会地であり、播磨国守護赤松氏が排他的支配権を認めていたとの主張である。これは大塚郷の住民が赤松氏から鷹や鶴の巣掛けの御番を仰せ付かっていたことによる勲功であるといい、番谷大塚山の地名説話ともなっている。

第二条では、得平氏が小松伐採のため入会地に侵入し、たまたま一人で荒物（供物にする鳥獣）取りに来ていた大塚郷の住民を松の木に縛り付ける事件が起きた。藤田氏の侍衆六三人が駆けつけて得平氏側と三日間の闘争に発展した。これを聞いた加東郡の依藤氏が仲裁（扱い）に乗り出して、先規の筋目どおり大塚郷の権利を認める裁定を下し、一件落着したという。

第三条では、山城氏が吉河上荘長谷村の住民を大塚山へ強引に押し入らせ、大塚の住民がこれを阻止しようと出向いた。双方殴り合いの喧嘩となり、大塚地頭の竹原氏が長谷村へ攻めかかり、山城氏も応戦する騒動となった。これを聞いた渡瀬氏が仲裁に乗り出し、大塚郷の権利を認める裁定を下したという。

第二条に登場する得平氏が吉河下荘北河村（異に小河村）を拝領したのが応仁の乱後のことであり、得平氏当主の定阿（異に宣阿）が赤松氏の拠点飾西郡置塩（おじお）城（姫路市夢前町）に常駐するのは天文年間（一五三二～五五）の中頃のことであった[8]。加東郡東条谷豊地（といち）（小野市中谷町）の城主依藤氏が三木城（三木市）城主別所村治に攻略されるのは永禄二年（一五五九）である[9]。第三条の事件はこれより後年のことになる。渡瀬（三木市吉川町）の城主渡瀬繁詮は三木合戦前後に台頭し[10]、羽柴秀吉に抜擢された[11]。

各時代の裁定者として、事件の当事者よりも上位の権力者である依藤氏・渡瀬氏・中川氏および伊木氏が登場する。第四条の中川秀成は桃山時代の、第五条の伊木忠繁は江戸時代初期の三木城主である。別所氏の名はみえない。

ここに長谷村住民を大塚郷三ヶ村の入会地に押し入らせた「山城殿」は、長谷村の在地領主とみて間違いない。なおＮＴＴ二〇一二年電話帳には、長谷に一一軒の山城姓登録があり、ほかに山城百貨店と山城薬局がある。

三　備中生坂藩士堀氏と出羽新庄藩士川部氏の先祖山城宮内

それでは、大宮富善氏が紹介された川部伊織家の「先祖書写」を見てみよう。

史料２　川部伊織家の「先祖書写」[12]

先祖書写

一高曾祖父山城宮内、生国播州三木之者ニ而御座候、同人儀、
前廉　秀吉公ニ而、知行千石被下置、御使番相勤罷在、其後
御国分之節　家康公江御附被遊、弐千石被成下、御普請大奉
行被　仰付、其後日光御普請之節病死仕候由、
一高祖父名字相改堀七郎兵衛、浪人ニ而罷有、若年之頃摂州於
大坂病死仕候由、
一曾祖父堀覚兵衛義、二歳之時父ニ離委細不分明候、覚兵衛義
松平下総守殿忠明公江知行弐百石ニて被召出、長柄之者三拾
人預り罷有候之処、忠明公隠居、同下総守殿忠弘公御代、播
州姫路より羽州山形江御所替之節又々浪人仕、夫ゟ備中軽部
郷柿木村江引篭罷有、寛文七未年於彼地病死、
一祖父甚五兵衛儀、十六歳ニ而明暦三酉年、当家江罷出申候、
右先祖書、池田丹波守様ニ罷有候堀市郎左衛門方ニ有之候書
付写候而遣申候、右甚五兵衛義者、曽祖父文齋様ニハ弟ニ而
御座候由、

川部造酒丞
隆直

於江戸写置也

〔傍線部分読み下し〕
一高曾祖父山城宮内、生国播州三木（みなぎ）の者にて御座候、同人儀、前廉（まへかど）、秀吉公にて、知行千石下し置かれ、御使番相勤め罷りあり、其の後御国（くに）分（わけ）の節家康公へ御附け遊ばされ、二千石なし下され、御普請大奉行仰せ付けらる、其後日光御普請の節病死仕り候由、

これは、新庄藩士川部造酒丞（みきのじょう）隆直が、備前岡山藩支藩の備中生坂藩（岡山県倉敷市生坂周辺）藩士堀市郎左衛門所持の先祖書を写したものである。以下の説明は大宮氏の文章を借りることにする。

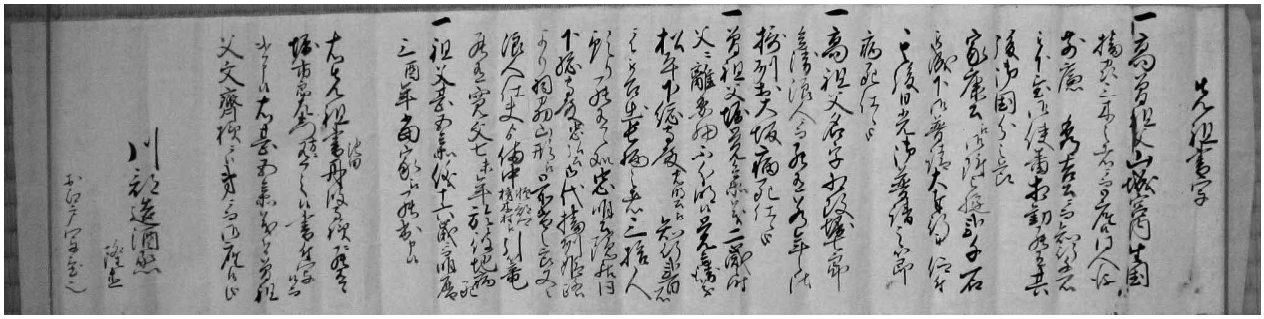
川部家の出自は、「先祖書写」により判明し、池田丹波守家臣堀市郎左衛門家と先祖を同じくする。

初代が播州三木（現兵庫県三木市）出の山城宮内であった。宮内は秀吉公、家康公に仕え、日光御普請の節、病死した。

その子が、名字を堀に改め浪人。若くして大坂で病死。

次が堀覚兵衛で奥平松平家初代播州姫路藩主忠明に二〇〇石で召出され、長柄（槍）の者三〇人を預かった。二代忠弘が姫路から山形に所替になった時浪人となり、備中軽部郷柿木村（現岡山県都窪郡清音村）に引きこもり、寛文七年（一六六七）にそこで病死した。

次が甚五兵衛で、十六歳で池田丹波守に仕えた。池田丹波守は岡山藩池田光政の三男輝録（てるとし）で、岡山藩の支藩・生坂藩の初代である。この甚五兵衛が川部造酒丞の曽祖父文斎（初代文右衛門の隠居名）の弟とある。初代文右衛門は堀家から川部家に養子に入ったか、家を別にして松平忠弘公に仕えたものとみられる。忠弘が山形藩一五万石に



出羽国新庄藩川部伊織家の「先祖書写」　（山形市　川部昌平氏所蔵）

移封になったのは慶安元年（一六四八）で寛文八年（一六六八）に下野宇都宮に所替となった。川部文右衛門は、忠弘家臣として山形に来てから十七年後に新庄藩に移ることになったものである。

堀市郎左衛門の高曾祖父にあたる山城宮内が、山城宮内少輔忠久その人である。「先祖書写」に記された経歴は、日光東照宮普請の節に病死との記事を除けば、ほぼ事実と確認できる。なお、堀覚兵衛を召し抱えた姫路藩主松平忠明（家康の孫）は、覚兵衛の祖父山城宮内少輔とともに、慶長十九年（一六一四）の大坂冬の陣後の大坂城堀埋め工事奉行を職掌した関係にあった[13]。

そして「大塚郷山之由来写」（史料1）の「山城殿」は、渡瀬繁詮と同じく豊臣秀吉に仕えた山城宮内少輔忠久と思える。

四　羽柴秀吉代官の山城宮内少輔忠久

次に掲げるのは、冒頭でふれた山城宮内少輔忠久書状である。

史料3　山城宮内少輔忠久書状（播磨「浄土寺文書」[14]）

以上

其元御寺中へ、御代官何角被仰、御迷惑之由承及候、定而給人ハ御存有是間敷候、御寺之事、寺領已下　上様（羽柴秀吉）へ我等申上、今まてそたち（疎達）申候、近年ニ相違候へハ笑止ニ候条、御奉行衆へ御理可申候、替事候者可承候、恐惶謹言、

山城宮内少
三月十二日　忠久（花押）

浄土寺
惣寺中
参

〔本文読み下し〕

其元（そこ）御寺中へ、御代官何角（なにか）と仰せられ、御迷惑の由承り及び候、定めて

山城宮内少輔忠久書状（播磨「浄土寺文書」）
画像提供．小野市立好古館

給人は御存じ是れ有る間敷候、御寺の事、寺領已下　上様へ我等申し上げ、今まで疎達申し候、近年二相違へ候へハ笑止二候条、御奉行衆へ御理わり申すべく候、替はり事候へば承るべく候、恐惶謹言、

羽柴秀吉から播磨国加東郡大部荘（小野市）内に給分地を与えられた家臣の現地代官が浄土寺に対して迷惑行為に及んだ。このため同寺が苦情を申し立てた。迷惑行為の具体的な内容は不明だが、山城宮内少輔がこれに応えて、奉行衆に申し入れると善処を約し、ほかに変事があれば申し出るよう伝えたものである。天正八年（一五八〇）の三木合戦終結後のものだが、年次は不明。山城宮内少輔は秀吉に代わって意思を伝える代官のようである。

五　加東郡松尾城主の山城宮内

冒頭でふれたように、旧版『加東郡誌』は天正の頃の松尾に山城宮内の居城があったという伝承を記している。

加東市松尾字野官に松尾城跡がある。近世に編まれた『赤松家播備作城記』等、古城記の類いに山城宮内の名は一切登場しない。『播州古城軍記』等においては、置塩城主赤松則房家臣の松尾五郎宗直を城主とする。まったく縁もゆかりもない人物が伝承に残ることはほとんどないので、山城宮内城主説は事実とみて良いと思える。山城宮内は地元に強い印象を残したのである。古城記の記載を絡めると、三木合戦後に城主の交替があったことを示している。

小字名の野官は現行の不動産登記記録によるもので、旧版『加東郡誌』にいう「字城」は俗称扱いである。東に下土井ノ下、南に南土井の小字名がある。

城跡は八幡神社の西隣に位置するが、神社境内も城域に含まれると思われる。「字城」は「土井」そのものだが、土塁・堀等は残っていない。『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』[15]によれば、民家の敷地とその南側の水田がⅢ郭で、民家への進入路を隔てて一段高くなった東側の水田を主郭とする。そして、主郭北側の一段下がった水田がⅡ郭となっている。

美嚢郡内の在地領主山城宮内少輔は、三木合戦後に羽柴秀吉から松尾の地を給されたものと思える。福田保内の松尾城と大部荘内の浄土寺とは、同じ加東郡内だが地域が異なる。山城宮内少輔は、少なくとも郡内の一定地域を支配管轄する代官であった可能性がある。

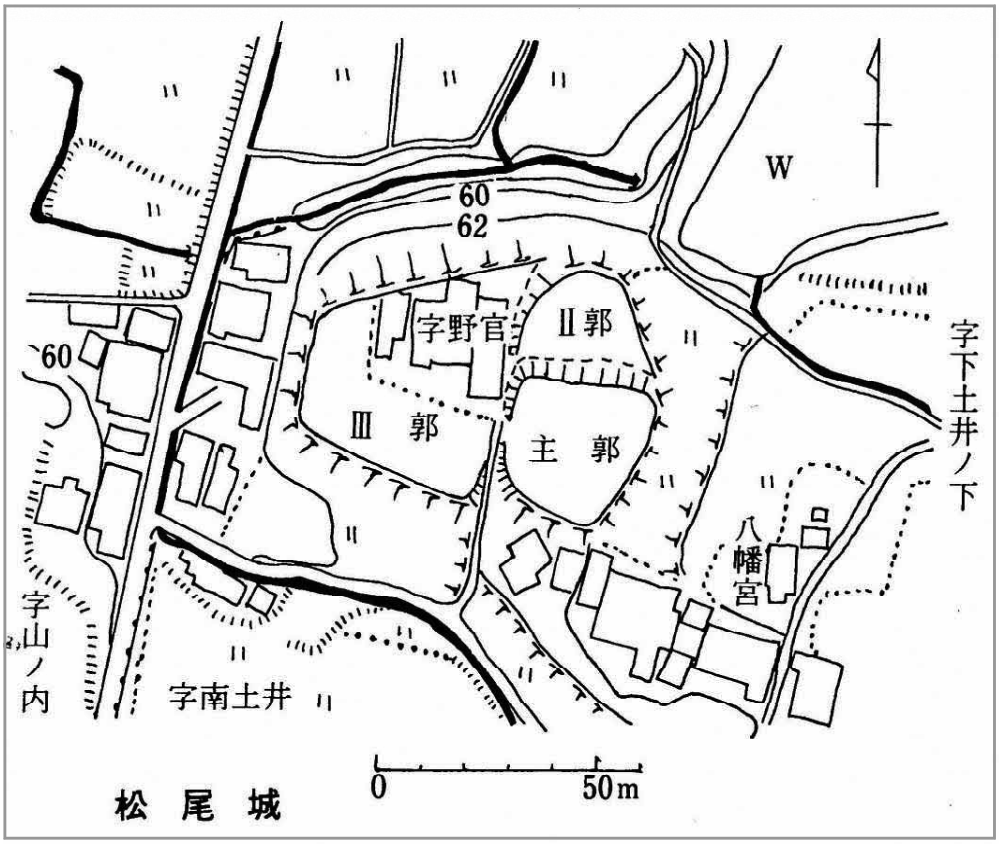
山城宮内少輔の立ち位置を理解するため、同様の存在であると思える土肥吉左衛門尉義勝についてふれておきたい。村井祐樹氏が紹介された「羽柴家文書写」[16]に年未詳十二月十五日姓未詳藤□衛門尉宛土肥義勝書状写がある。より一層の秀吉への取りなしを依頼したものである。村井氏は『角川日本地名大辞典』を引いて「播磨加東郡に土肥氏の居城があったという」と言及されている。

この土肥氏居城は加東市大畑（近世の土沢村とその枝村の蔵之谷村）の東条川沿いにあった土沢城である。天川友親著「増補播陽里翁説」に、土沢村住人土肥氏として弥太夫家春・次郎太夫次重・吉左衛門家春および天正の頃の弥九郎を列挙し、代々構居すとある。[17]天川友親は多くの資料収集につとめた江戸時代の知の達人であった。美嚢郡佐野村（三木市細川町豊地）土肥氏の系譜を入手したのである。吉左衛門家春の通称名（仮名）は義勝と同じである。系譜の内容の信憑性はともかくとして、地名と名字および通称名という三つのキーワードが一致する。偶然とは思えない。土肥氏を土沢村の在地領主とみて差し支えないのではないか。二〇一二年ＮＴＴ電話帳には、大畑に土肥姓四二軒、同事業者二軒の登録がある。なお

松尾城跡附近　空中写真
国土地理院 CKK802-C8B-27 1980/10/02(昭和55年)

当地の南端の峠を越えれば、吉河下荘桃坂村に至る。この谷筋は東条谷から美囊郡吉河下荘への主要道であった。

土沢城は豊地城主の依藤氏歴代、後には別所重棟の支城であったはずである。土肥義勝が自身で城郭を構えるほどの武士とも思えない。三木合戦後に秀吉から土沢城を与えられたものとみるべきであ



松尾城の縄張図（『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』）

ろう。ただし土肥氏は、現代において大畑に四〇軒以上の一族が居住しているから、山城氏とは違って、他国へ羽ばたくことはなかったと考える。

六　金切裂指物使番の山城小才次

山城宮内少輔忠久は、文禄の役に豊臣秀吉の使者として、朝鮮出征中の島津義弘等の陣中へ赴いている（史料４）。この当時は小才次と名乗っていた。

史料４　豊臣秀吉朱印状（「島津家文書」[18]）

其表為見廻、美濃部四郎三郎・山城小才次被差遣候、長々在番辛労不被及其是非候、殊普請以下丈夫ニ申付、番等無油断趣、被聞召届候、就其人数・兵糧等相改、可申越候、猶以、兵糧当春舟数相揃、追々渡海之儀被　仰出候条、可成其意候、将亦、小袖一重被遣候、猶両人可申候也、

（文禄三年）正月廿八日　朱印

羽柴薩摩（島津義弘）侍従とのへ

〔本文読み下し〕

其の表見廻るがため、美濃部四郎三郎・山城小才次を差し遣わされ候、長々在番辛労其れ是非に及ばざれず候、殊に普請以下丈夫に申し付け、番等油断無きの趣、聞こし召し届かれ候、其の人数・兵糧等に就き相改め、申し越すべく候、猶もって、兵糧当春舟数相揃へ、追々渡海の儀仰せ出でられ候条、其の意をなすべく候、将亦、小袖一重遣わされ候、猶両人申すべく候なり、

秀吉は、文禄三年（一五九四）一月二十八日に朱印状を出し、美濃部四郎三郎と山城宮内少輔を朝鮮へ派遣して、出兵中の島津義弘等の諸将に対して長期在番を慰労し、在陣の軍勢総数および兵粮の検査を命じた。ほかにも吉川広家・龍造寺政家・鍋島直茂・毛利元康等に宛てた朱印状がある。

朝鮮から帰国した美濃部四郎三郎と山城小才次は、秀吉に詳細な調査報告をしている。そして秀吉は、同年五月十九日に朱印状を出し、浅野弾正少弼長政（長吉）と山中山城守長俊に命じて、吉川広家等の諸将に対して番普請等の指示をさせた（史料５）。島津義弘等ほかの諸将に宛てた朱印状もある。

史料５　豊臣秀吉朱印状（「吉川家文書」[19]）

美濃部四郎三郎・山城小才次令帰朝、其地様子具被聞召届候、番普請等無油断旨、辛労至候、家中者共、為番折可召置候、被差越候御兵糧古米ニ不成様ニ入替可置候、於員数者、無相違様ニ可申付候、猶浅野弾正少弼・山中山城守可申候也、

（文禄三年）五月十九日　朱印

羽柴吉川（吉川広家）侍従とのへ

〔本文読み下し〕

美濃部四郎三郎・山城小才次帰朝せしめ、其の地の様子具に聞こし召し届かれ候、番普請等油断無き旨、辛労の至りに候、家中の者共、番折として召し置かるべく候、差し越され候御兵糧古米にならざる様に入れ替へ置くべく候、員数においては、相違なき様に申し付くべく候、猶浅野弾正少弼・山中山城守申すべく候なり、

秀吉の信任が厚い家臣山城小才次が朝鮮へ派遣されたのである。そして、秀吉の意思を伝達指示している。三木合戦前後に秀吉に仕え、以後重用されてきたことが分かる。

美濃部と山城の両名は金切裂指物使番であった。この役職は、使番衆・馬廻衆の中から特に選抜して取り立てた秀吉直属の使者である。金地の指物（旗指物）の幟の端を切り裂いて風になびきやすく

した「金の切裂の指物」を授けられた。この指物は一目で分かる身分証明である。多くは豊臣氏の譜代家臣であり、大名になった者もいる。山鹿素行の『武家事紀』には、金切裂指物使番三二名の中に、山代小才次と美部四郎三郎の名も挙がっている。[20]

七　伏見城普請奉行の山城宮内少輔

伏見の地を「九郷」とよばれる農村から最大の城下町に変えたのは、豊臣秀吉の権力・財力を駆使した都市建設である。秀吉はこの地に隠居所を造ろうと、天正二十年（一五九二）八月普請を始めている（兼見卿記）。石垣をめぐらし城構えであったことから隠居城ともよばれた。翌文禄二年閏九月二十日には秀吉が伏見に居を据えたとある（時慶卿記）。秀吉は同年暮には、この隠居城を本格的な城郭に造り変えることと、広大な城下町を建設することに着手している。指月（しげつ）の城とよばれる本格的な城の建設と並行して、向島にも出城を建設。秀吉が新しい指月の城に入ったのは、文禄三年八月一日、秀吉のこの伏見城（指月）移徙によって伏見の地が中央政治の場となった。城郭・城下町の建設に伴い伏見周辺では、大土木工事が進められた。伏見は景観はもちろん、その政治的・経済的位置をも大きく変えていった。文禄三年の後半に入ると城下町内部の開発と町割も急速に進められた。町割奉行山城宮内少輔の下で、武家地・社寺地・町家地の策定、道路・橋梁の整備が行われて、伏見市街の原型がほぼ出来上がった。文禄五年（一五九六）閏七月十三日、大地震が畿内を襲った。秀吉は余震まだなりやまぬ翌十四日、城郭を指月から伏見山に移して再建するよう命じ、ただちに城と城下町の再建工事が始められ、伏見は以前の活況を取戻した。城下には全国大小名の武家屋敷が出現し、全国に類例のない巨大都市へと発展し、集住してくる武士団の需要を満たすための商人や職人たちが町人居住区を形成した。[21]

これ以降も建設は続いた。秀吉死去直前の慶長三年（一五九八）六月十四日、近江芦浦観音寺（滋賀県草津市）にあてた伏見城普請奉行衆連署状がある（史料６）。

史料６　伏見城普請奉行山城忠久等連署請取状（「芦浦観音寺文書」）[22]

家康衆ニ被下すき（鋤）・くわ（鍬）の事

合三百五拾丁者　但此内すき五拾丁也

右請取渡申候、仍如件、

慶長三年　佐藤三河守（花押）
六月十四日　滝川豊前（忠征）（花押）
佐久間河内守（正実）（花押）
山城宮内少輔（忠久）（花押）

観音寺

〔本文読み下し〕

家康衆に下さる鋤・鍬の事、

合三百五十丁てへり　但し此の内鋤五十丁なり

右請取（うけとり）渡し申し候、仍って件（くだん）の如し、

伏見城普請奉行衆は、徳川家康分担の工事に使用するための鋤と鍬の拠出を芦浦観音寺に命じていた。これが届いたので、請取状を出したのである。滝川豊前守忠征・佐久間河内守正実および山城宮内少輔忠久の三名は秀吉の金切裂指物使番であった。

芦浦観音寺は、織豊期から蔵入地代官・船奉行を勤めたことで知られる。八世賢珍は天正十三年頃から豊臣政権の代官を勤め（同年七月一日豊臣秀吉金子請取状）、九世詮舜は同十五年から蔵入地代官を命じられており、琵琶湖の湖上交通を管轄する船奉行も兼任し

た。船奉行の恒常的な仕事として船数や船の規模を点検する点定、運上銀の徴収があった[23]。ここでは蔵入地代官として伏見普請の用具を提供したのである。

八　江戸城普請奉行の山城宮内少輔

山城宮内少輔忠久は、慶長十二年（一六〇七）の江戸城普請の奉行人の一人として、他の奉行たちと連署状を出している（史料7）。三月二十六日に、公儀修築普請が四月一日から始まることを、上野沼田城（群馬県沼田市）城主真田伊豆守信之（上田藩主）に告げたもの。江戸城は徳川家康が築いた城で、江戸幕府の政庁である。この当時は家康嫡男秀忠の居城であった。

史料7　江戸城普請奉行等連署状（「真田家文書」[24]）

態申入候、仍來月朔日御普請被成候、然ハ御家中小割之儀、廿一日ニ被成候様尤ニ存候、惣割之事者最前御座候キ、爲御分別申入候、恐惶謹言

（慶長十二年）三月廿六日　山田信濃守長次（花押）
佐原左衛門尉助□□（宗保）（花押）
郡主馬守□□（堅忠）（花押）
佐藤三川守□□（花押）
山城宮内少（忠久）輔□□（花押）
水原岩見守（吉勝）□□（花押）
瀧川豊前守忠征（花押）
笹邊隱岐守□□（花押）
眞田伊豆（信之）様　人々御中

〔本文読み下し〕
態（わざ）と申し入れ候、仍（すなは）ち來月朔日御普請なされ候、然らば御家中小割の儀、二十一日になされ候様（さま）尤もに存じ候、惣割の事は最前御座候へき、御分別のため申し入れ候、恐惶謹言、

江戸城の公儀普請は、慶長十一年三月一日から西国大名が　十二年には西国大名に代わって東国の大名が工事に携わった。

白峰旬氏は、普請奉行連署者八名のうち、山田信濃守長次・郡主馬守宗保・水原岩見守吉勝の三名を亡豊臣秀吉の遺子秀頼の家臣、山城宮内少輔忠久・瀧川豊前守忠征の二名を徳川家康の家臣と認定し、佐原左衛門尉助・佐藤三川守・笹邊隱岐守の三名も徳川家の家臣と推測する。そしてこの書状が、笠谷和比古氏の学説である豊臣・徳川二重公儀体制論の立証を行っていくうえで、その基礎史料であると位置づけされている[25]。

前掲出羽新庄藩川部伊織家の「先祖書写」（史料2）によれば、豊臣秀吉が御国分（くにわけ）の節に山城宮内少輔を徳川家康の配下として送り込んだという。国分は、天正十八年（一五九〇）の小田原征伐後に行われた、家康の関東移封（転封）を指す。当初は秀吉家臣のまま与力の立場だったのであろう。瀧川忠征も同様かと思える。

なお、家康家臣としての山城宮内少輔の知行高は二〇〇〇石とある。この件に関する史料を見つけることはできなかった。ただし、美濃国「慶長郷帳」に同国加茂郡下古井（しもこびむら）村（岐阜県美濃加茂市古井町周辺）に旗本伏屋左衛門（為長）佐領四〇〇石と同山城宮内（忠久）領三〇〇石の記載があるという[26]。

九　駿府城普請奉行の山代宮内少輔忠久

山代（山城）宮内少輔忠久は、慶長十三年（一六〇八）の駿府城普請にも普請奉行として関わっている。中川秀成宛の連署状を掲げる（史料８）。秀成は「大塚郷山之由来写」（史料１）に登場した人物だが、この当時豊後岡藩（大分県竹田市周辺）藩主であった。[27]

史料８　山本重成他六名連署状（「中川家文書」）

已上

御手前三之丸（駿府城）石垣堀江尻ゟ御舟入并御材木被相届候、橋地已下迄悉出来之旨達　上聞候処ニ御感悦被成御黒印候、則御普請衆返遣之候、然者御同名左近殿・同小平太殿・山岸金右衛門尉殿・吉田久左衛門尉殿・柘植左吉殿、其外御家中衆昼夜被入御情候、爰元之様子右之御衆委細可被申上候、恐惶謹言、

（慶長十三年）八月廿四日　　牧助右衛門尉　長勝（花押）
佐久間河内守（政実）　正□（花押）
佐藤駿河守　堅忠（花押）
山代宮内少（忠久）　□久（花押）
村田権右衛門尉　□次（花押）
瀧川豊前守　忠征（花押）
山本新五左衛門尉　重成（花押）

中川修理（秀成）様　人々御中

「中川家文書」山本重成他六名連署状
（出典：神戸大学文学部日本史研究室所蔵：神戸大学附属図書館　中川家文書）

〔本文読み下し〕

御手前三の丸石垣堀江尻より御舟入ならびに御材木相届けられ候、橋地以下迄悉く出来（しゅつたい）の旨上聞に達し候ところに御感悦御黒印なされ候、則（すなは）ち御普請衆これを返し遣わし候、然らば御同名左近殿・同小平太殿・山岸金右衛門尉殿・吉田久左衛門尉殿・柘植左吉殿、其のほか御家中衆昼夜御情を入れられ候、爰元（ここもと）の様子右の御衆委細申し上ぐらるべく候、恐惶謹言、

徳川秀忠に将軍職を譲った大御所家康は駿府に隠居した。駿府城は大修築されるのだが、慶長十二年に失火により本丸御殿等を焼失した。その後直ちに再建工事が開始され慶長十五年に完成する。中川秀成はこの再建工事に動員されたのである。

ここでの花押を「浄土寺文書」の山城宮内少輔忠久書状（史料3）と比較すると、上部が当世風に角張って縦長となっている。ただし、基本的な形は変わっていない。

浄土寺文書の書判
天正年間

中川家文書の書判
慶長十三年

十　日光東照宮造営と山城宮内少輔の死

元和二年（一六一六）四月十七日に徳川家康が死去した。遺言に基づき一周忌後に日光山に東照宮（当初は東照社）が造営されることとなった。本多上野介正純と日根野織部正吉晴が惣奉行で、本多藤四郎正盛と山城宮内少輔忠久および糟屋新三郎が副奉行に命じられた。実務は当然副奉行が担当した。ある夜、山城宮内少輔は相奉行の本多正盛と口論となり、本多によって打擲された。遺恨を感じた山城宮内少輔はその思いを書面に認めた上で自害した。

この件を記した史料として、江戸幕府二代将軍徳川秀忠の事績を記す公式記録『東武実録』（史料9）、江戸時代初期の公式記録『徳川実紀』の一部『元和年録』（史料10）等がある。

史料9　『東武実録』三[28]
（元和三年）

四月、日光山御廟社、造営ノ事、本多上野介正純、日根野織部正吉晴、台命ヲ奉テ是ヲ監ス、本多藤四郎正盛、山代宮内、糟屋新三郎奉行ス、然ル所ニ糟谷ハ造営最中ニ病死ス、或夜、藤四郎、宮内二人相議スヘキ事有テ、日根野カ旅宿ニ会合シテ、夜深更ニ及テ帰ラント欲スルノ処ニ、藤四郎ト宮内口論シテ、藤四郎カ刀ノ鞘トモニ是ヲ持テ宮内ヲ打倒ス、宮内寄宿ニ帰リ、其夜ノ旨趣ヲ書置テ、自害ス、是ヲ聞テ藤四郎モ同ク自殺スヘキノ処ニ、遷宮ニ奉行ナキ事ヲ思テ、其期ヲ待、遷宮畢テ後、遂ニ自殺ス、四十一歳、

〔読み下し〕

四月、日光山御廟社、造営の事、本多上野介正純、日根野織部正吉晴、台命を奉りてこれを監す、本多藤四郎正盛、山代宮内、糟屋新三郎奉行す、然るところに糟谷は造営最中に病死す、ある夜、藤四郎、宮内二人相議すべき事ありて、日根野が旅宿に会合して、夜深更に及びて帰らんと欲するのところに、藤四郎と宮内口論して、藤四郎が刀の鞘ともにこれを持ちて宮内を打ち倒す、宮内寄宿に帰り、其夜の旨趣を書き置きて、自害す、これを聞きて藤四郎も同じく自殺すへきのところに、遷宮に奉行なき事を思ひて、其の期を待ち、遷宮終わりて後、遂に自殺す、四十一歳、

史料10　『元和年録』坤[29]
（元和三年）

卯月廿二日、日光普請奉行本多藤四郎於壬生切腹被仰付、去年日光御宮之御普請被仰付、当春大形出来、御普請奉行ハ本多藤

四郎、山城宮内少輔、糟谷新三郎、惣奉行者日根織部（野脱カ）正也、此内糟谷者、去年秋散々相煩、江戸江罷帰、無程相果、其後御普請も当春出来、御掃除并勘定之儀いそぎ度よし、宮内申候処ニ、本多大酒ニ而絨部も上戸、両人毎度寄合、長酒ニ而はたし不申候間、宮内切ニ其席へ来候而、催促申候付、本多酔狂腹立、刀のこじり（鐺）にて、宮内こびん（小鬢）をつき申候間、宮内、か様之神宮之奉行被仰付候へハ、何と有之候とも、喧唾には仕間敷由申、御掃除勘定有増いたし、御代官松下孫十郎ニ清帳調相渡、宇都宮江罷出、終ニ切腹仕候、其後色々御穿鑿候得とも、終ニ以藤四郎も切腹被仰付候、

〔読み下し〕

卯月二十二日、日光普請奉行本多藤四郎壬生において切腹仰せつけらる、去年日光御宮の御普請仰せつけられ、当春おおかた出来、御普請奉行は本多藤四郎、山城宮内少輔、糟谷新三郎、惣奉行は日根織部正なり、此の内糟谷は、去年秋散々相煩い、江戸へ罷り帰る、程なく相果つる、其の後御普請も当春出来、御掃除ならびに勘定の儀いそぎ度きよし、宮内申し候ところに、本多大酒にて絨部も上戸、両人毎度寄り合い、長酒にて果たし申さず候間、宮内切に其の席へ来り候て、催促申し候につき、本多酔狂し腹立て、刀の鐺（こじり）にて、宮内小鬢（こびん）をつき申し候間、宮内、か様の神宮の奉行仰せ付けられ候へば、何とこれあり候とも、喧唾には仕り間敷由申し、御掃除勘定有増（あらまし）いたし、御代官松下孫十郎に清帳調へ相渡し、宇都宮へ罷り出で、終に切腹仕り候、其後色々御穿鑿候へども、終にもって藤四郎も切腹仰せつけられ候、

発端の事件は日根野吉晴の宿舎の酒の席で起きた。元和三年三月十五日に東照宮社殿が竣工した。四月十七日には将軍秀忠臨席の東照宮祭礼が行われる予定であった。残務整理を急ぐ山城宮内少輔に対して、本多と日根野は二人で毎晩のように長酒という有様で仕事がはかどらない。このため山城宮内少輔が催促に訪れた。ここで酒に酔った本多が腹を立て、刀の鐺で山城宮内少輔のこめかみを突いて転倒させたのである。

山城宮内少輔は、一人で御掃除勘定をひととおり済ませて、代官松下孫十郎に清書した帳簿を提出し、宇都宮へ出てここで切腹して果てた。本多正盛との諍いの顛末を記した遺書も残していた。これは遺恨による切腹で、相手を名指しして自ら先に腹を切ることによって、相手にも切腹を強いる指腹（さしばら）という復讐の手段であった。一説に知故の福島正則の助言を得たというが、そんな時間があったのかどうか。なお、川部伊織家の「先祖書写」（史料2）に「日光御普請之節病死仕候由」とあるは、後世世間体を気にしてこれを憚ったものと思える。子息が名字を変えるのもこのためであろう。

本多正盛も造営工事副奉行の職務終了後、元和三年四月二十二日に松平成重の板橋城下において自刃して果てた。

十一　おわりに

ここまで可能な限り事実を羅列して解説を加えてきた。山城宮内少輔忠久は、播磨国美嚢郡出身者のなかで文書や記録が最も多い人物である。その事績のすべてを網羅することは叶わないので、この辺でまとめとしたい。

山城宮内少輔は、もとは一在地領主であった。吉河上荘長谷村の一村領主であったと思える。小稿で紹介した行動をみると、彼は事務処理能力が極めて高く、組織の運営や政策の実行を滞りなく進める有能な武士であったようだ。豊臣秀吉にその能力や才能を高く評価され、家臣に取り立てられた。大名にはならなかったものの、代

官・金切裂指物使番・普請奉行として活躍している。秀吉が播磨国計略のために国人層を懐柔したことは村井祐樹氏の論考に詳しいが[30]、それが在地の一村領主にまで及んでいたことは興味深い。

山城宮内少輔は、秀吉から徳川家康に与力として下賜されたようだ。そして家康も、彼を重用している。小稿ではふれなかったが、慶長十四年（一六〇九）の名古屋城など、ほかの普請にも関わっている。また慶長五年の戦乱時には、上杉景勝を討つための会津征伐に従軍し[31]、さらに家康西上決定を告げる使者として大津城主京極高次のもとへ派遣されている[32]。これらは戦闘行動ではなく、折衝や兵站といった実務面での活躍が期待されたものと思える。

日光東照宮造営時に、山城宮内少輔は職務を疎かにする相奉行本多正盛によって打擲された。正盛は家康の側近内藤正成の息子で、父子ともに天正十年（一五八二）織田信長横死後の家康伊賀越えに随行した経歴をもつ功労家臣である。このため、相手に切腹を強いる復讐の手段をとって自害した。外様の旗本にほかの方法はなかった。結果は幕臣山城家断絶を招いたのだが、理不尽な本多正盛を許せなかった。実に生真面目な性格の人だったに違いない。

ともあれ、山城宮内少輔の子孫が播磨から遠い地で堀氏（備中国窪屋郡生坂、現倉敷市）および川部氏（出羽国最上郡新庄、現新庄市）として存続していたことも判明した。また、故郷である長谷の地には現代において一〇軒以上の一族が居住している。同様の事例は他氏にもみられる。秀吉に仕えた播磨の武士は意外に多い。今後は全国に展開した彼らについても、もっと目を向ける必要性を感じるところである。

余談だが、山城宮内少輔忠久の姻戚についてふれておく。慶長二十年（一六一五）大坂落城時に城中から京都まで逃げおおせたお菊（岡山藩池田家医師田中意徳の祖母）の回顧録『おきく物語』（松浦静山『甲子夜話』4、平凡社．東洋文庫）に、山城宮内の娘が登場する。

城外へ脱出した淀殿女中のお菊は、和睦交渉のため大坂城へ出向いた帰りの常高院（浅井初、淀殿妹、お江姉）一行と出会う。これには豊臣秀頼女中である山城宮内の娘を連れ立っていた。この娘は帷子（かたびら）一枚、下帯も一つであったので、お菊は帷子一枚と下帯一つを与えている。お菊は松丸殿（秀吉側室京極龍子）を頼ろうと宮内娘とともに京都へ上る。京都で織田左門（頼長）の屋敷に出向いて援助を求めたが、大坂落人ということで門内にも入れてもらえなかった。しかし、左門姪の山城宮内娘を帯同していることが分かると、左門は「娘を一人ひろひたり（拾）」と大いに喜び、一転して饗応を受けたという。左門は織田信長の弟有楽斎（長益）の二男だが、嫡男である。山城宮内少輔の妻室は、左門生母平手清が先夫との間に設けた子でない限り、有楽斎の娘ということになる。

注

（1）播磨「浄土寺文書」年未詳三月十二日山城宮内少輔忠久書状。『兵庫県史』史料編中世二と『小野市史』第四巻〔資料編1〕に収録。

（2）高柳光寿・松平年一著『戦国人名辞典』増訂版（吉川弘文館、一九八一）。山代忠久として以下のとおり収録。

山代忠久（やましろただひさ）（？～1617）（宮内少輔）初め小才次といった。秀吉馬廻、また金切裂指物使番。文禄四年正月朝鮮に出張して、毛利元康に在陣の労を犒った（萩藩閥閲録）。慶長五年の戦乱には、家康の会津征伐に従軍（鈴木文書）。そののち家康に仕え、十一年は江戸城、十二年には駿府城の普請奉行。十九年大坂冬の陣が畢ると、松平忠明等と同城堀埋め工事奉行を命ぜられた（武家事紀、他）。家康の死後下野東照宮の普請奉行、元和三年四月同僚本多正盛と相論して、憤激のはて自殺（東武実録・元和年録、他）

（3）加東郡教育会編『加東郡誌』（初版一九二三）第二篇第二章第四節大字の起沿革の松尾の項。以下のとおり記載。

當地字城（シロ）には天正の頃山城宮内といふものゝ居城ありしといふ。今其趾に小山氏の邸宅あり。

（4）多田暢久「織豊方陣城の地元での伝わりかた」（『歴史と神戸』一八八号、一九九五）。

（5）播磨「清水寺文書」天文二十年三月十八日山城官兵衛田地寄進状。『新修加東郡誌』別編と『兵庫県史』史料編中世二および『社町史』第三巻〔資料編1〕に収録。住吉西佐々倉名内泉村の西小谷の先祖売得田地を播磨清水寺へ寄進したもの。所在を特定できない。

（6）大宮富善「新庄戸沢藩川部伊織家文書」（『羽陽文化』第一六八号、二〇二四）。

（7）『新三木市史』第四巻〔資料編古代・中世〕。

（8）得平因幡入道『得平記』。同書は『赤松記』として『群書類従』第二十一輯（続群書類従完成会、現在八木書店が業務承継）に収録。また、『姫路市史』第九巻〔史料編中世2〕および依藤保「赤松伝記『得平記』研究ノート―写本四種集成と研究雑記―」（姫路市立城郭研究室『城郭研究室年報』第三一号、二〇二二）に収録。

（9）依藤保『播磨の国人領主依藤氏の動向』（私家版、二〇一七）。

（10）渡瀬氏は軍記を含め三木合戦資料に一切登場しない。これは不自然である。秀次事件で失脚した者の行動記録は抹殺されている。しかし、『備前老人物語』（神郡周校注・松浦鎮信撰『備前老人物語・武功雑記』、現代思潮社、一九八一）所収稲次宗雄書付によれば、渡瀬繁詮が秀吉方として一定の立場にあったことが分かる。この書付は、寛永四年（一六二七）九月五日、稲次が当主豊氏を諫めて久留米藩有馬家を去ろうとしたときの申し状。冒頭に自身三木籠城のことを記す。落城後赦免され、渡瀬繁詮の配下に入ったという。気骨のある戦国武士で、寛永十一年、高齢をおして島原一揆の城攻めに加わり戦死した。繁詮が失脚したあと、与力家老で義弟（正室の弟）の有馬豊氏が領地と家臣団を継承した。渡瀬氏は有馬家の家老となった。稲次宗雄書付を以下に記載。「三木」は三木城を指す。

有馬玄蕃殿家来稲津壱岐暇申す時の書き付け

播磨の三木を、太閤様、攻められ候時、私十七にて二年寵城つかまつり、一年は無主にて居り申し候。其のうち二度、手に合い申し候。奥山佐渡守（盛昭カ）殿御存知ゆえ、太閤様へ仰せ上げられ、脇坂甚内（安治）殿、御奉行として、三木より罷り出で、太閤様へ御目見え仕り候えば、渡瀬（繁詮）に預け置かれ候こと。

（11）注（2）書『戦国人名辞典』増訂版所収記事を以下に記載する。冒頭の横瀬氏や由良成繁の子等の記載は偽り。福岡藩黒田家と同様に他家の系譜により仮冒する。有馬豊氏の姉を正室とすることから、播磨国美嚢郡の出であることが明白。

渡瀬繁詮（わたせしげあき）（？～1595）（小次郎、左衛門佐）横瀬氏ともいった。由良成繁の子で国繁の弟、名は重詮、繁勝ともいったらしい（系図纂要）。天正十三年三月秀次に属し、根来寺僧徒の討伐に出動、和泉千石堀の敵を撃破、十八年小田原平定後の七月十三日、遠江横須賀城三万石（太閤記・系図纂要）、のち五千石を加増さる。文禄元年朝鮮の役のとき安芸広島城に駐屯（毛利家文書）。三年伏見城と大和多門城の工事を分担（当代記・前田家所蔵文書）、名義はいずれも家臣有馬豊氏。四年七月秀次事件に連坐して改易、佐竹義宣に預けられ自殺（寛政譜・武家事紀）。川角太閤記は家康に預けられたとしている。

（12）注（6）大宮富善氏論文。小稿掲載史料は筆者依藤の私意で一部を改変している。

（13）『武家事紀』巻第二十五．続集．戦略．大坂上．慶長十九年十二月二十一日条（山鹿素行先生全集刊行会編『武家事紀』中巻、一九一五）。以下のとおり記載。

廿一日、安藤帯刀（直次）・成瀬隼人正（正成）・永井右近大夫（直勝）ニ命セラレ、諸手ノ仕寄ヲ引取セ玉フ、ホリヲ埋ル奉行松平下総守（忠明）・本多美濃守（忠政）・同豊後守（康紀）・滝川豊前守（忠征）・佐久間河内守（政実）・山城宮内少輔（忠久）・山本新五左衛門（重成）各四間ヲ堅メ、埋ル人ミタリニ城中ヘ入ラシムヘカラスト也、

（14）注（1）書所収播磨「浄土寺文書」。

（15）兵庫県教育委員会『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』、一九八五。

（16）村井祐樹『中世史料との邂逅―室町・戦国・織豊期の文書と記録―』（思文閣出版、二〇二四）第七章所収「羽柴家文書写」。土肥義勝書状写は以下のとおり。村井氏は天正六年に比定される。

今度者御状本望候、但身上之儀付而、筑州（秀吉）様種々御懇之由、誠毎篇申候、懸御目給、外聞実儀身余、忝次第候、此方堪忍難相続躰候、年内無余日事候間、来春ニ成候而、御談合可申候、可然様ニ御分別候て、可預御取成候、随而雖軽微至極候、鱈三つ　筑州様へ進上申度候、是

又御披露頼存迄候、恐々謹言、
十二月十五日　義勝（花押影）
（折紙見返奥ウハ書）
「（墨引）　土肥吉左衛門尉
藤□衛門尉殿　　義勝」
〔本文読み下し〕
今度は御状本望に候、但し身上の儀に付きて筑州様種々御懇ろの由、誠に毎篇申し候、御目に懸け給い、外聞実儀身に余り、忝き次第に候、此方堪忍相続き難き躰に候、年内余日無き事に候間、来春になり候て、御談合申すべく候、然るべく様に御分別候て、御取りなしに預かるべく候、随ひて軽微と雖も至極に候、鱈三つ筑州様へ進上申し度く候、是れ又御披露頼み存ずる迄に候、恐々謹言、

（17）天川友親編『校訂　播陽万宝智恵袋』名跡之部（播磨史談会、一九一八）所収．喬木堂（天川友親）『増補播陽里翁説』三木郡の条。以下のとおり記載がある。
一佐野村土肥小二郎藤原朝臣加茂家次の幕の紋は日の九也、副紋は裏菊也、九郎義経一萬餘騎にて三草合戰より一の谷の後鵜越に寄袷ふ時土肥小二郎加東郡樫村粉飲坂の上三木郡堺九郎御曹司御見参に参入候は元暦元年二月五日のこと也、元暦元年より慶安五年まで四百六十九年也、
土澤村住人　土肥彌太夫藤原明臣垣田氏家春
同　土肥次太夫藤原朝臣垣田氏次重
同　土肥吉左術門藤原朝臣加茂氏家春
天正の頃は土肥彌九郎といふ、代々構居す、

（18）名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』六（吉川弘文館）。同書には諸将宛の同内容の朱印状が写しも含め全一五通収録されている。

（19）注（18）書。諸将宛の同内容の朱印状が写しも含め全一二通収録されている。

（20）『武家事紀』巻十四．続集．豊臣秀吉家臣の金切裂指物使番の項（山鹿素行先生全集刊行会編『武家事紀』上巻、一九一五）

（21）以上、伏見については、平凡社『日本歴史地名大系』27〔京都市の地名〕．伏見区伏見町の項による。

（22）『草津市史資料集』6〔観音寺〕（草津市教育委員会）。

（23）以上、平凡社『日本歴史地名大系』25〔滋賀県の地名〕．草津市芦浦町芦浦観音寺の項による。

（24）米山一政編『真田家文書』上巻（長野市、一九八一）。打懸封紙ウハ書きを省略した。

（25）白峰旬「研究ノート「（慶長十一年）二月廿五日付江戸城公儀普請奉行連署状」について―笠谷和比古氏の学説・二重公儀体制論に関する新出史料の紹介―」（別府大学史学研究会『史学論叢』第四七号、二〇一七）。

（26）平凡社『日本歴史地名大系』21〔岐阜県の地名〕．美濃加茂市下古井村の項。

（27）神戸大学文学部日本史研究室『中川家文書』（臨川書店、一九八七）

（28）『大日本史料』十二編之二十七、元和三年四月二十二日条。

（29）注（28）書、同日条。

（30）村井祐樹『中世史料との邂逅―室町・戦国・織豊期の文書と記録―』（思文閣出版、二〇二四）。

（31）注（2）書『戦国人名辞典』増訂版所収山代忠久の項。典拠の「鈴木文書」を確認することはできなかった。

（32）徳川家康書状写（内閣文庫所蔵『譜牒余録』巻之四十六）。
従今日廿六日御人数差上候、我等事も急度令上洛候間、御手前之儀弥堅固可被仰付事肝要候、則修理殿先手相加候、早速可為御参会候、為使山城宮内（忠久）差越候得共、先以飛脚申候、恐々謹言、
七月廿六日　御名乗　御在判
大津宰相（京極高次）殿
〔本文読み下し〕
今日二十六日より御人数（おにんず）差し上げ候、我等の事も急度（きっと）上洛せしめ候間、御手前の儀いよいよ堅固に仰せ付けらるべき事肝要に候、則（すなわ）ち修理殿先手あひ加へ候、早速御参会せらるべく候、使として山城宮内差し越し候得共、先ず飛脚をもって申し候、恐々謹言、

（三木市文化財保護審議会副会長）

みなぎの５
―令和４～６年度　三木市立みき歴史資料館年報・紀要―

発行日　令和８年３月 31 日発行
編集・発行　三木市立みき歴史資料館
住所　〒 673-0432
兵庫県三木市上の丸町４番５号
印刷　小野高速印刷株式会社